

「主体的・対話的で深い学び」の授業実践を振り返って

【「主体的・対話的で深い学び」の授業実践を行う上での注意点】

近い将来予想されているのは「厳しい挑戦の時代」。そんな時代を生きていく生徒にとって今後必要となる資質・能力の育成を目指した新学習指導要領とじっくりと向かい合い、授業計画を立てた。全ての教科で探究活動が重視されているが、理科でいえばただ生徒が観察・実験を行う、教師が演示実験を見せるということだけでなく、その前後においてどのように生徒が探究していくかをイメージしながら計画を立案することが肝要であることがわかった。そして、私が授業計画する際に最も時間を割いたのが、「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 理科編 理数編」のP10にある「資質・能力を育むために重視する探究の過程のイメージ」である。

【「資質・能力を育むために重視する探究の過程」について】

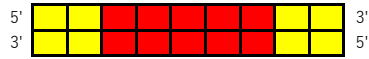
探究の過程として推奨される学習過程は大まかに、①課題の把握（発見）、②課題の探究（追究）、③課題の解決に分類され、各過程はさらに細分化されている。この過程について、順を追って授業を展開することが理想ではあるが、②→①、③→②など、展開によっては順を入れ替えてもよしとされている。今回私は「PCR法」を題材に授業を計画したが、他の様々な分野で授業を行うと考えた場合、過程をどのように構築するかは多くのパターンが存在する。教師の力量により、生徒の資質・能力の育成の差は大きく異なることも考えることができる。

【授業実践の振り返り】

今回は「PCR法」の授業を行った。コロナ感染症の検査方法であるため、身近な話題として生徒の関心は非常に高かった。PCR実験を行う手立てもあったが、ヌクレオチドに見立てた付箋を用いることで、教室内で簡単にPCR法を再現させ、知識・技能の習得を高めることができたため、こちらでよかったと考える。数か月後に定期考査に出題したが、この授業の印象が強く、知識定着につながっていたことが確認できた。付箋を用いたPCR法の再現後に、実際にPCR検査として行われているリアルタイムPCR法との違いについて考えさせたが、生徒たちだけでは授業内で解答を導くことができなかった。普段の授業内で、生徒に探究する活動を行わせていなかったことが原因として挙げられる。また、授業の数分間ではなく、数日間考えさせる活動があってもよかったと考える。

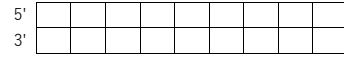
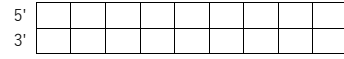
全体を通して生徒たちはグループ活動に主体的に取り組んでいたが、対話的という意味ではグループ活動を行ったという事実だけで終わっていたという意見もいただいた。授業内で一見活発な動きはなくとも、生徒は自問自答（＝自分との対話）を繰り返している授業もあるようだ。そのような授業を今後は追求していきたいと考えている。

1
サイクル
目

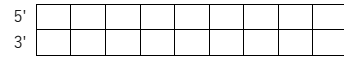
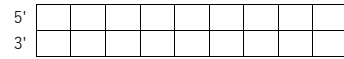
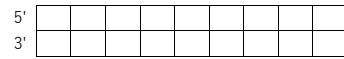
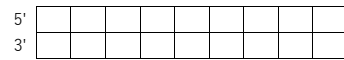
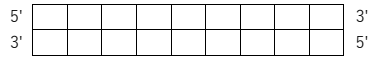
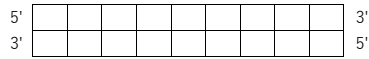
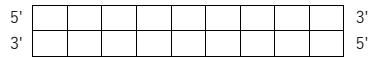
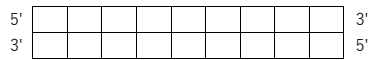


↓の下側：役割2が終わった時点で記入

→の右側(or ←の左側)：役割3が終わった時点で記入



2
サイクル
目



3
サイクル
目

